

日本国内での活動

- 4/22 日本歯科大学【D Muse 2018】にて活動紹介
- 5/26 明星大学にて講義
- 10/21 熊本市講演会主催【サヘルを知る会くまもと】  
「NGO活動を通して見えて来たもの マリ共和国の場合」
- 6/9 「山上の光賞」授賞式
- 9/29 JICS 事業報告会
- 12/16 【カラコンサート 【かけはし2018】

# 2017年度(平成29年度) カラ事業報告書



小学校の落成を音楽とダンスで祝う

ご注意ください:任意団体となり会の名称は「カラ西アフリカ農村自立協力会」となりました。

カラ西アフリカ農村自立協力会 <http://ongcara.org/>

東京事務局  
〒177-0054  
東京都練馬区立野町7-9 クリオ吉祥寺壺番館101  
Tel:03-3929-5767  
E-mail: centre@ongcara.org

バマコ事務局  
BP E367 BAMAKO MALI  
Tel:223-2020-9096

カラ東京事務局が移転しました。

新住所: 〒177-0054 東京都練馬区立野町7-9 クリオ吉祥寺壺番館101 電話: 03-3929-5767

毎年、年間報告書を発行し会員並びに支援下さる方々へ報告させていただいておりますが、今回は例年よりかなり遅れてしまい、申し訳ございませんでした。会員の方々、ご支援くださる方々にお詫び申し上げます。

### これまでの支援事業を振り返って

事業は住民の手に移りました。  
2019年4月で平成の時代が終わりを告げ、新しい年号となりました。カラの支援事業は平成に始まり、この時代を駆け抜け、そして平成のうちに一応の成果を見ることが出来ました。このことは、村の人々に生きて行く道を拓いたと言えると思います。

皆さまのご支援で建設した多くの建物は何も語りませんが、村の人々の意識の中には多くが刻み込まれてきたと思います。

当初はいつになったら、何年経ったら村の人々の主導で活動が進み、自立できるのだろうか？ もしかしたら自立は不可能ではないか？ などと不安に思い、そして悩み、困難な事態にも遭遇しました。時々スタッフの失態もあり、その都度今は亡きバマコ事務局責任者のジャラ氏と共に解決し、「鬼のようになって」カラの理念を通して事業を進めてきました。

サハラ砂漠が国土の3分の2を占めるマリ共和国は自然環境が厳しく、年間の雨量も少なく、十分な食料を収穫出来ず、年間を通して食料不足の状態です。このため人々は経済的にも苦しく、貧困はいつまでも解消されないままです。若者は出稼ぎして一族を支えているのです。

近年は、時々発生するテロリストによる襲撃や殺戮により治安の悪化が続いています。しかし現地の人々はここを故郷として生活しているため、「このような状況の下においても、安定的な収入を得て、健康で自立した生活を構築する」という問題を少しでも解消していくような支援が、我々ボランティア団体に課せられた深刻な問題でした。

では、カラはこの問題にどんな方法で取り組んでいくか？ その第一と考えたのは、「まず、地元の人々との信頼関係を築く」ということ。いわゆる資金を持ってくる支援団体だからと言って「上から目線」は絶対に禁止です。そして、日本の資金による事業だからと言って、日本人の感覚での事業の進め方や人々への接し方が果たして適しているかどうか、これを見極めることが重要でした。

我々カラは、「マリの人々の心をよく知り理解すること」、そして「カラ自らが率先して行動を起こすこと」が重要と考え、村に住み込み、村人と同じ物を食べて人々の生活に密着した活動を開始しました。

実際の支援活動は何から始めるか？ 村内調査をして村人と相談し、必要とされていることの優先順を決めました。しかし、支援事業については、カラは「困っているからといって直ぐに与えるのではなく、何らかの代価が必要」と考えました。そしてカラの立場、村側の立場を明確にし、支援を行う条件として村側と契約をとりかわしました。村からの代価としては、事業の支援後(ハード、ソフト面に関わらず)は、すべて村の管理・運営として責任を持つこと、上手いかわなくても彼ら自身で解決するよう努力すること、約束を破った時には金額で返済してもらう、としました。



女性の集い、歌とダンスを楽しんでいます

事業を介しての村の開発は、女性の理解と努力により大きく左右されます。

女性たちは他の村の変わりゆく状況に刺激され、「我々の村もあのようになりたいわ」と村を動かす原動力になります。女性は何事につけても夫の許可が必要です。しかし女性たちは、誘われなくても手仕事や衛生病気予防学習に、遠く離れた村から(村を代表して)背に赤ん坊をおんぶして早朝から何キロもテクテクと歩いて集まって来るのです。偉いナ、といつも感心し、私だったらどうしたろうか、と常に考えていました。

豊かになった状況を羨むのは人間だれでも同じこと、まして子供の早死に泣き、食料不足に苦労している女性たちは、どんなにか辛い日々を過ごして来たのだらうと思います。同じ女性として彼女たちの状況を考えると、「早く確実に自らの手でいろいろ学び、それを生きていく技にして欲しい」と願ったのでした。

現在の事業地域のバグ村周辺の再開発事業について、この村はダウンバコムの中心村であり、カラが1993年に独立し初めて支援事業を開始した地域です。しかし村人の協力も少なく、労働は無料では行わずに代価を求めてくるような状態でした。この地域ではマラリア予防、井戸掘り、女性の1haの野菜園や植林造成地、女性センター等など多くの支援をしました。村人の大部分は「やってもらって当然、俺らは貧乏だから」と協力せず、働くのはカラのアシスタントスタッフと数名の村人だけでした。しかし女性の野菜園だけは継続していました。我々はこれ以上をこの地域に求めることは不可能と考え、2000年にここを撤退しました。

そして、より生活環境の厳しい北方のトゥグニ地域に移動し、コナナ村とモバ村に新規に事務局を設置して支援事業を開始しました。その後のトゥグニ地域の村々の素晴らしい努力によって、自立した状況を見聞しました。そうするとバグ村から「トゥグニのように」と改めてカラに再開発の要請があり、2016年から再開発が始まりました。

現在は女性だけの活動として、適正技術の指導、識字学習の実施、資金を貯えての小規模貸付資金の開始もはじまりました。2007年に要請があり建設された小学校で学び卒業した女性が、研修を受けて村で誕生した助産師第1号になりました。その後は他の村でも村出身の助産師が誕生し、産院や診療所が計4ヶ村に開設されました。勿論働くのは全員村から選ばれて助産師になった人たちです。教育を受けることが出来ず、一生懸命に農作業を行いながら子供をたくさん産むことが女性の人生、と納得していた女性たちが、学んで助産師になったのです。これは女性にとってまさに大事件であり、強いインパクトのある出来事となったでしょう。

このように人々の反省という裏打ちがあつての再開発は、積極的で力強いものです。

今後は、真の自立へ向かっていく姿が見られると思います。



収穫を待つ綿花



野菜園で働く女性

## 保健・衛生教育の成果と活発な女性【健康普及員(略称KMT)】の活躍

【健康普及員】はとても活動が活発で、彼女たちに潜んでいた才能が芽を出してきました。村に産院が開設した時期に合わせて組織したことも良いタイミングだったと思います。私たちは目に見えて成果が上がって来たことに驚き、丁寧に個々に確実に積み重ねるような指導が成果を上げることを改めて知りました。そして同じ村の仲間から教えてもらうことは、とても尋ね易い、ということもあると思いました。

この事業の目的は、医療環境の劣悪な地域で、母親が家族の健康を守るための知識を学び、疾患を最小限にとどめ、家族を病気から守り、健康な家族生活を営んでいこう! という試みで、「わが家族は私の手で」という意気込みです。(表-2)

今まで村の人たちはこのような病気予防や正しい衛生知識を学んだことがなかったために、多くの誤解があり命を簡単に落としてしまうような事態が発生していました。今は【健康普及員・KMT】を育成し、彼女たちが指導者となり、村で定期的に啓発学習を行う体制を作りました。これが功を奏したのです。堂々として積極的なKMTの指導による村の啓発学習会は、選ばれた女性たちの舞台ですから家族も自慢です。この学習会の経過と共に、今までの妊婦の出産時の死亡や子供の下痢、マラリアで簡単に命を落とすことが無くなりました。

啓発学習会では毎回多くの質問が出され、納得するまで説明されます。その結果誤解も徐々に解けて来ました。政府主導の予防接種の接種率はゼロに近い状況でしたが、この原因は、主催者側が事前に詳細な説明を行わないために、村人の間でいろいろなデマが流れ、接種を受ける人がいなかったのです。現在は予防接種の意味を「KMT」が熱心に説明していますから誤解が解けました。特に幼児の予防接種は両親が非常によく理解し、100%近い人たちが接種を受けるようになり、母親が多忙の時には父親が子供を連れて行く姿も見られるようになりました。

疾患だけではなく栄養や家族計画について、その他日常生活に不可欠な事項も学習内容に含めています。流産も死産も幼児の死亡も殆ど見られなくなりました。毎月送られてくる現地産院の報告書を読みますと、この7~8年では、未熟児は見られず最小体重が1.9kg、大きい新生児は4kgもありました。通常、出産時の新生児

### 表2 2012年以降カラ開設の産院後の変革



バマコの診療所で育成研修中の助産師(後)とアワ(前)

## 女性の自立活動支援

現在、ファネゲタブグー村で女性多目的センターが建設中です。ここは女性適正技術や識字教室等多くの活動に使用される予定で、今年11月頃から開設使用されます。我々の村の事務所があるバブグ村から3kmと近い距離にあるファネゲタブグー村との関わりは1994年から始まりました。いち早く識字教室建設や野菜園造成、植林地造成を行いました。村の識字教師が非常に積極的な活動をしていた村で、このような青年が一人でもいると村全体が変わってきます。今後は女性たちがシッカリ頑張っていくと期待しています。



建設中のファネゲタブグー女性センター

## 2018年(平成30年)度カラ西アフリカ農村自立協会事業計画・事業予算

事業資金		(円)
収入	会費収入	650,000
	寄付金収入	3,000,000
	事業助成金・補助金収入	2,500,000
	販売収入(バザーによる収入)	500,000
	その他の収入(講演会、コンサート入場券、他)	400,000
	2017年度からの繰越金	1,764,717
<b>収入合計</b>		<b>8,814,717</b>
事業計画項目		
マリ現地経費		6,500,000
バブグ村玉ねぎ保存庫建設費、スタッフ8人分給料、ドゴニ産院備品、女性用バイク1台、バマコ事務所管理費用、他		
日本側事業費		1,500,000
機関紙及び年次報告書発刊、コンサート経費、アルバイト料、出張費 その他		
<b>合計</b>		<b>8,000,000</b>
次年度へ繰り越し金		814,717
<b>支出合計</b>		<b>8,814,717</b>

カラは、新事業の要請があっても村の人にとって不可能な事業は承諾しませんでした。そして我々日本人側にとって「出来る事と出来ない事」をはっきり説明しました。それは「忍耐と我慢」が重要なことでした。

ボランティアの外国人が村に住むということは、現地の人に「頼めばなんでもくれる」と思われがちです。これには用心!!用心!!です。カラの支援の本質を忘れないで貫くことが非常に大切でした。

その結果、2007年頃から支援事業の多くは村の人々の手に委ねられる程の成果が見えてきました。これまで収入の無かった女性たちが収入を得、自由なお金を持つようになりました。若い女性たちが出稼ぎに行かなくても村内で資金を稼げるようになったからです。娘達の出稼ぎ者の多かったドウグラコロ村では出稼ぎ者がゼロになり、家族が非常に喜んでいきます。各事業の管理、運営は村人が行うようになりました。コミン長は村人が自立していく姿を喜び、誇りに思い、カラに代わって人々の活動を積極的に総括するようになりました。

こうして、今までカラが行っていた活動がトウグニコミュン(行政)の手に移管されていったのです。



小学校落成式の郡長(右から) 村長、スタッフのアワ、正装した郡長

## 村での経験から

カラは今までに100ヶ村以上の村を支援してきましたが、人々の意識は村によって異なり、同じ事業を実施している村間でも発展の違いが生じます。その原因は男性優位の村社会で、これが開発を拒む大きな問題でした。村によっては「作業は無料では行わない、手当を出せ!!」と言うのです。

例え彼らの生活に必要な水を供給する井戸の掘削でも、態度は同じでした。「この作業をしなければ、農作業でも他の仕事でも日当を得ることが出来る」という考え方でした。そしてそういった村のボスの男性の発言にみんなが従ってしまうのです。

またある時、産院の建設にあたり「カラ東京からはセメントによる建設費用が調達されているが、しかしマリ人スタッフ達が質の落ちる土レンガを代用し、その差額をネコババしている」と言うのです。こんな時には、スタッフではなく私が村人(男性、女性参加の会議で)に説明します。「そんなに我々を信用しないなら、これ以上支援はできない、他の村に産院を建設する」と言うと、「少し待ってくれ」と村の男性たちは改めて相談し「わかった、ではカラの言うようにしよう」ということになり、解決をみます。

このような男性の行動・言動に対して女性たちは「どこの国も、マリ政府も我々の健康を考えてくれない、産院も建ててくれない。そこをカラが支援してくれるのが何故わからないのか?」と男性に対して非常に批判的でした。日常生活の苦勞を背負っている女性の意識の方が男性より高く、協力も得やすいのです。何につけても女性たちと親しく話し合い理解を深めること、これが事業を順調に進めて行けた重要なポイントでもありました。

また、どこかの村の女性達が素晴らしい成果を生み出す、それが「口」を介して周囲の村々に伝わり、大きなモディベーションになります。